特集

新美南吉 生誕100年

今年の七月三十日、児童文学者・新美南吉の生誕100年を迎えます。この機に、その生涯と作品世界について特集いたします。三人の作家が語る作品の魅力、児童文学研究者による解説などを通し、彼の人となりや思想を、かい間見ることができればと思います。

作家が語る 南吉作品の魅力

どれほど優しく見えたとしても

作家 石井睦美

巳之助が、幼少のころ母親を亡くした南吉に重なる。死によって母親を奪われた南吉は、その不条理を受け入れてはいなかったのだ。いちばん大事なものを他者によって奪われ失われるなら自分の手で、南吉はそう願わなかったろうか。巳之助はそう願わなかったろうか。ひょっとして『ごんぎつね』でごんを殺さなくてはならなかったのも同じ理由かもしれない。

南吉の文体は優しく静かだ。でも、そのなかには狂気が潜んでいる。その狂気こそが、物語に命を与えているのだと思う。

いしい むつみ

一九五七年、神奈川県生まれ。出版社勤務を経て、執筆活動に入る。『五月のはじめ、日曜日の朝』で新美南吉児童文学賞などを受賞。著書に「すみれちゃん」シリーズ（偕成社）など。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

初めて触れた南吉の作品は『おじいさんのランプ』だった。

孤児の巳之助少年が、町で「花のようにあかるいガラスのランプ」を目にする。巳之助の住む村ではまだランプを灯す家などなかったため、彼には初め、それがなんなのかわからない。それでも、暗い夜をあかるませるうつくしいものは、巳之助のこころを捉え、動かし、ついに彼はランプ屋として身をたてるに至った。時は流れ、町には電気がひかれた。早晩、それは村にもやってくることになる。受け入れがたい思いが巳之助を苛む。けれど、時の流れを止めることができないことを一番に知っているのは、ほかならぬ巳之助自身だ。なぜなら、電気はあの日の巳之助のランプそのものなのだから。

新しかったものはやがて古いものとなり、新しくきたものに、その位置を奪われる。滅びるもの、失われていくことへの、痛みや悲しみが、優しい語り口に滲んでいる。すべてのランプを灯して、木にぶら下げ、それに石を投げつけては壊していく。ひとつまたひとつとランプは壊れ、消えていく。三つ目のランプが消えてなくなったとき、巳之助はもうランプを壊すことができなかった。巳之助の悔しさが伝わる。寂しさが染みる。

そんな巳之助にこころを寄せ、時代の流れを残酷なものに感じたのは、小学生のときのことだった。以来ずっと、それはわたしのなかにあり続けた。

おとなになって読み返したとき、巳之助がランプを壊したもうひとつの、いや、ほんとうの意味がわかったような気がした。巳之助にとって、ランプはただの商売道具ではなかった。それは、巳之助を経済的に助け、字を覚えさせ書物を読むことを教えた。つまり、孤児の少年巳之助の親代わりともいえるものだった。それはかけがえのないものであり、失われてはならないものだ。

悲しみの湧き水で洗われる世界

作家　志茂田景樹

別の町から越してきて中学に入った僕には友達が一人もいなかった。そのことと、体が小さく虚弱だったこともあっていじめを受け、学校へ行くのが辛くなった。

ある日の昼休みに、いじめっ子達から避難したい気持ちから学校の図書室に入った。棚の本の背表紙を見て回ってすぐに、僕は「新美南吉」という著者名に関心をそそられた。

（新しく美しい）

とは何といい言葉だろう。いじめから逃れたいという思いが新しく美しい世界にいる自分をイメージさせたのかもしれない。

そうして抜き取った童話集で『ごん狐』をはじめとしていくつかの新美南吉作品と出会った。

どの作品も僕には悲しく切なく、とりわけ『ごん狐』の結末には涙を誘われた。

（何で撃っちゃうんだよう！）

心で叫んだが、それはけして兵十を咎めたものではなかった。

悲しく切なくてもそのときの全作品が僕の心に美しく染みた。それはどうしてだったろう。

高校に進学してまもなく新美南吉の作品を読み返したことがある。それまでに読んだ作品に限ってのことで、作品の数にしても三十点に届かなかったと思う。

新美作品には『仔牛』『里の春、山の春』などのように、ほのぼのとして心が温かくなるような作品も多いのに、いやむしろ、そういう作品のほうが主流なのに、やはり、読後は悲しく切ないものが胸に染みてくる。それが新美南吉の作品の魅力であり、かつ秘密に僕には思えた。

高校から歩いて十五、六分のところに谷保天満宮があり、その頃、そこへ散策に行った。拝殿の横手のほうに湧き水の小池があって山葵が栽培されていた。水が湧いているところは水面がぼこぼこ盛り上がっていた。

そのさまを見ているうちに、新美南吉は湧き水のようにあふれる悲しみで物語を紡いでいたのではないか、とはっと思った。その悲しみは新美南吉のとても深淵で純粋な人間性から湧き出ているもので、悲しく辛い気持ちで読んだ読者のその悲しみ辛さえもきれいに洗い清める力を持っている。

ずっと後年になって僕は読み聞かせ活動を始めたが、自作の童話を読み聞かせるときも新美南吉の悲しみの力を借りている。

しもだ　かげき

一九四〇年、静岡県生まれ。中央大学法学部卒。一九七六年、「やっとこ探偵」で小説現代新人賞を受賞し、執筆活動を開始。一九八〇年、「黄色い牙」で直木賞受賞。「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国各地で読み聞かせの活動を行っている。

人として忘れたくないもの——南吉の物語世界

作家　那須田　淳

ときとして思いがけないことがおきる。

でも、そんなときこそ、僕らは立ち止まり、もう一度自分のあしもとを見つめなおすよい機会なのかもしれない。

東日本大震災もそうだった。

僕は今、東京とドイツのベルリンに、年に半分ずつ暮らしているのだけれど、当時はベルリンにいて、入ってくるニュースに胸を痛めた。そして、すぐにドイツの友人たちと一緒に、被災地に向けて支援物資を送るとしたらなにがよいかと話し合ったものだ。その一つにランプはどうだろうか、電気も通らないところで使えるから役に立つのではという意見があった。結局、被災地の受け入れが難しいとのことで送らなかったのだけれど、そのとき、僕は新美南吉の『おじいさんのランプ』を思い出さずにはいられなかったのである。

ランプ売りのおじいさんが、新しい電灯時代の到来で商売がうまくいかなくなったことを嘆き、村に電灯を引き込むことを決めた区長さんを恨んで家に火をつけにいく。そこで、火打石を使おうとするが、なかなか火がつかず、こんな古くせえものは、いざとなると間に合わないのだと悪態をつく。だがそのとき察するのだ、世の中が進んで、自分のランプこそ、その「古くせえ」ものになっていたことに。

今になって、ランプのほうがかえって便利なこともあると思うのは皮肉に感じるが、この物語の核心は、文明の発達や新しい時代への讃美ではもちろんない。

人というものは弱いものだ。うまくいかなかったときに人のせいにし、恨んだり妬んだりする。でも、そこで自分に負けてはだめだと南吉は、おじいさんの口を通して、孫に語りかけるのである。

後悔し、改める。これは、『花のき村と盗人たち』など他の南吉の物語にも通じる世界観である。

南吉の扱う物語の登場人物たちは、みなどこか問題があったり、頼りなかったりする。そんな彼らはその弱みゆえに流されそうになるが、でも最後で踏みとどまり、前を向いて生きようとするのだ。

南吉の物語を読んで流す涙があたたかいのは、ああ、僕もこういうところがあるなあと思いつつ、主人公たちの改心といった生き方に救われ、どこかで癒されるからだろう。

過ちに気がついたら直す。それは人として忘れてはいけないものに違いない。

災害やいじめ、不況にと揺れる今という時代だからこそ、もう一度、自分を見つめるためにも、ゆっくり南吉の物語と向き合ってみたいと思うこのごろである。

なすだ　じゅん

一九五九年、静岡県生まれ。早稲田大学卒。一九九五年からドイツのベルリン市に在住。著書に、坪田譲治文学賞受賞作『ベーターという名のオオカミ』（小峰書店）など、共訳書に『新訳　飛ぶ教室』（角川つばさ文庫）などがある。